

木に上った子供

小川未明

青空文庫

あるところ、辰吉たつきちという少年しょうねんがありました。辰吉たつきちは、
 小さい時ちい分に、父ちちや母ははに別わかれて、おばあさんの手てで育そだてられま
 した。

ほかの子供こどもが、やさしいお母かあさんにかわいがられたり、姉ねえさん
 や、兄にいさんにつれられて、遊あそびにいったりするのを見みると、辰吉たつき
 吉ちは、自分じぶんばかりは、どうして、独ひとりぼっちなのであろうと悲かな
 しく思おもいました。

「おばあさん、僕ぼくのお母かあさんは、どうしたの？」と、辰吉たつきちは、
 おばあさんにたずねました。すると、おばあさんは、しわの寄よつ
 た手てで、辰吉たつきちの頭あたまをなでながら、

「おまえのお母かあさんは、あっちへ行ってしまったのだ。」と答こたえ
ました。

辰たつきち吉は、あっちというところが、どこであるか、わかりませ
んでした。ただ、あちらの雲くもの往おう来らいする、そのまたあちらの、
空そらのところだと思おもって、目めに涙なみだぐむのでありました。

「おばあさん、僕ぼくのお母かあさんは、いつ帰かえってくるの？」と、辰たつきち
吉はたずねました。

すると、おばあさんは、孫まごの頭あたまをなでて、

「おまえのお母かあさんは、空そらへ上のぼってお星ほしさまになってしまったの
だから、もう帰かえってこないのだ。おまえがおとなしくして、大おおき
くなるのを、お母かあさんは、毎まい晩ばん、空そらから見みていなさるのだよ。」

と、おばあさんはいいました。辰吉たつきちは、それをほんとうだと信しんじました。それから、毎晩まいばんのように、戸外おもてに出て、青黒あおくろい、夜よるの空そらに輝かがやく星ほしの光ひかりを見上みあげました。

「どれが、僕ぼくのお母かあさんだろう？」と行って、彼かれは、ひとり、いつまでも夜よるの空そらに輝かがやいている星ほしをば探さがしました。

いつであつたか、辰吉たつきちは、おばあさんから、人間にんげんというのは死しんでしまえば、みんな天てんへ上のぼつて、星ほしになつてしまうものだきと聞きいていました。

夜よるの空そらに輝かがやく星ほしの中なかには、いろいろありました。おおお大きく、ぴかぴかと、白しろびかりをするものや、また、じつとして、赤あかく輝かがやいてあかいるものや、また、かすかに、小ちいさく、ほたる火びのように光ひかつて

いるものなどがありました。辰吉は、どれが、自分の恋しいお母さんの星であろうと思ひました。

「お母さんは、きつと、僕の家うちの屋根やねの上うへにきて僕を見てください。だろ。」と、辰吉は信しんじました。

彼は、頭かの上うへの空そらばかりを探さがしたのでした。そしてやさしそうな、あまり、大おおきく、強つよく光ひからない、一いつつの赤あかい色いろの星ほしをお母さんかあの星ほしだときめたのであります。

その星ほしは、目めにいつぱい涙なみだをためて、なにかものをいいたげに、じつと下したを見下ろみおしているのであります。

辰吉たつきちは、口くちのうちで、幾いくたびも、「お母さんかあ、お母さんかあ。」と叫さけびました。そして、彼かれは、夜よるの風かぜに吹ふかれて、いつまでも外そと

に立^たつてゐることがありました。

「辰^{たつきち}吉^{かぜ}や、風^{かぜ}をひくといけないから、家^{うち}へお入^{はい}り。」と、おば

あさんは、家^{いえ}のうちから呼^よびました。

すると、辰^{たつきち}吉^{うち}は家^{いえ}へはいりながら、

「僕^{ぼく}、お母^{かあ}さんの星^{ほし}を見^みていたのだもの。」といいました。このとき、おばあさんは、しわの寄^よつた大^{おお}きな手^てで、辰^{たつきち}吉^{あたま}の頭^{あたま}を黙^まつてなでなされたのであります。

辰^{たつきち}吉^ちが、やつと十二になつたときでありました。

おばあさんから別^{わか}れて、五、六里^りも隔^{へだ}たつた、ある村^{むら}へ奉^{ほう}公^{こう}に
いかなければならなくなりました。

はじめで、知^しらぬ家^{うち}へきた辰^{たつきち}吉^ちは、さびしくて、朝^{あさ}、晩^{ばん}、人^{ひと}

のいないときには、「おばあさんは、いまごろどうしていなさるだろう。」と、思い出して、目にいっぱい涙をためていました。

この家の主人は、どちらかといえば、厳格すぎる人でした。

「うんと働かなくちや、いい人間になれない。」と行って、辰吉に、いろいろなことをいいつけました。

辰吉は、使いにやらせられたり、水をくませられたり、いろいろなてつだいをして休む暇もなかったのです。こんなとき、どんなに、やさしかったおばあさんのことを思い出して、なつかしく思ったでありませんよう。また、ありがたく思ったでありませんよう。

しかし、夕飯の後は、いつも、辰吉は、外に出て、自分の

故郷こきようにいるときと同じように、空そらの星ほしを仰あおぎました。やさしい赤あかい色いろの星ほしは、そこでも見みられたのであります。死しんだお母かあさんは、自分じぶんについてきて、この家いえの屋根やねの上うへで、じつと見守みまもつていてくださるように思おもいました。

「みんなお母かあさんが知しっていてくださるのだ。」と、辰吉たつきちは、空そらを仰あおぎながらひとりでいいました。

村むらの端はしの方ほうに、寺てらがありました。寺てらの境内けいだいには、一本ぼんの高たかいすぎの木きがありました。夏なつも、やがて終おわりに近づちかづいて、秋あきになろうとしていたころであります。まだ暑あつい日ひが近づちかづきました。子こ供どもらはみんな、涼すずしい寺てらの境内けいだいにやってきては鬼おにごっこをしたり、かくれんぼをしたりして遊あそんでいました。

「この木は、天までとどいているよ。」と、子供の一人が、高いすぎの木を見上げていいました。そのときみんなは、遊びに疲れて、木の下にやつてきて休んでいたのであります。

「ばか、天は、もつと、高いよ。」と、一人の子供がいいました。「この木は、天までとどいているよ。」と、前にいった子供は繰り返していいました。

「ばか、天は、一里も、二里も、十里も、百里も、もつと、もつと高いのだよ。」と反対した子供は、それを打ち消して叫びました。

みんなは、二人のいうことをおもしろがつて聞いていました。そして、笑ったり、また、ほかのことを話したりしていました。

「だって、星が、木の頂についているじゃないか。」と、前に木が天についているといった子供がいました。

「そう見えたつて、ついていないのだよ。」と、反対した子供は、あくまで反対をしました。

「ほんとうに、今日の空は近いな。」と、ほかの子供の一人がいきました。

「先生が、秋になると、空気が澄むから近く見えるのだといったよ。」と、木の頂が天についていないと反対した子供はいいました。

「だってあんなに、近くなつて木の頂について見えるじゃないか？ 盲目！」と、天と木とがついていると、最初いった子供が

怒りました。そして、二人は、けんかを始めました。

「おい、けんかをするな。よせよ！」と、その中で、いちばん大きな子供がいました。

「あのうちに、人間の住んでいる星があるんだってね。」と、ほかの子供が、口をはさみました。

このとき、辰吉は、おばあさんが、人が死ぬと、みんな天に上って星となるのだといわれたことを思い出した。そして、先刻から自分も、やはりこの木の頂のところまで、空が低く下りてきているような気がしてしかたがなかったのです。

「お母さんが、降りてきてくださったのじゃないかしらん。」と、心で思っていました。

まだ、二人の子供は、けんかをつづけていました。

「けんかをしなくたって、いいじゃないか。だれか、木に上つてみればわかるだろう。」と、大きな子供がいました。

しかし、だれも、この高い木の頂のところまで、上つていくというものはなかったのです。

「僕が、上つていこう。」と、辰吉はいいました。

すると、みんなが、びっくりしたように、辰吉の顔をながめました。

「君が上つていく？」

「高いぜ、おつこちたつて知らないぜ！」

「君は、ほんとうに上れるかい。」と、みんなは、辰吉を見て

くちぐち
口々にいいました。

辰吉は、独り、黙つてうなずきました。そして、小さなげたを木の根もとに脱ぎ捨てて、木に上りはじめました。

みんなは、驚いた顔をして、上を見していました。あたりは、すでに暗くなつて、木の枝が、風に吹かれていますばかりであります。そして、星の光が、すぐ木の頂のところひかに光つているように、夜の空そらに美しく輝いていました。

辰吉は、だんだんと上つていきました。そして、小さな体は、黒い枝の間にはいつて、見えなくなつてしまいました。

「もう、あの高い、頂まで上つたらうね。」と、下では、子供らが話をしていました。

「どうしたんだろうね。まだ下りてこないよ。」

「おうい。」と、木の下では、子供らがわめいていました。

どうしたのか、辰吉は、いくら呼んでも返事をしなければ、

また、下りてきませんでした。子供らは、不思議なことに思いは

じめました。そして、いつまでも、そこに立って上をながめてい

ました。

夜風は、木の枝に当たって、かすかに鳴り音をたてています。

そして、あたりは、まったく夜となつてしまった。みんなは、よ

うやく気味悪さを感じはじめたのです。

「きつと、この木の上にだいいじゃがすんでいて、食ってしまった

のだよ。」と、一人がいうと、みんな、大声にわめいて、その

木きの下したから退しりぞいて、上うえを仰あおぎました。中なかには、家いえの方ほうへ走はしつていったものもあります。ただ、木きの下したには、辰たつきち吉きちのはいていた小ちいさなげたが、二つ残のこっているばかりでありました。

こうして、家いえに逃にげ帰かえった子供こどももありましたけれど、また、辰たつきち吉きちの身みの上うえを氣遣きづかつて、いつまでも、その木きの下したから去さらなかつた子供こどももありました。

「どうして、こんな高たかい木きに上のぼつたのだ。」と、集あつまつてきた大お人ひとたちは、口々くちぐちにいいました。

しかし、夜よるで暗くらかったから、だれも、氣味悪きみわるがつて上のぼつていくような人ひともありませんでした。ただ、下したから大おお声こゑを出だして、呼よぶばかりでした。しかし、やはり、なんの返へん答とうもなかつた。

「明日あすになればわかるだろう。」といって、その人ひとたちは帰かえりました。

いつしか夜よが明あけました。みんなは木きの下したに集あつまってきました。そして、大人おとなの一人ひとりが木きの上のぼり上のぼっていききました。すると枝えだに、辰たつき吉ちの着物きものがかかっているばかりで、体からだはなかったのです。みんなは、それを不思議ふしぎに思おもいました。だれも、その真相しんそうはわからなかったのです。辰たつき吉ちが、こうもりになったというものもあれば、また、辰たつき吉ちは、ふくろうになったのだといったものもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「少年倶楽部」

1927（昭和2）年7月

※表題は底本では、「木《き》に上《のぼ》った子供《こども》」
となっております。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木に上った子供

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>